

当たり前じゃない「ありがとう」

小学五年 堀口 七碧

夏休みのある日、弟の体調が悪く高熱が出て入院することになりました。弟の症状は思った以上に悪くお母さんも弟と入院することになりました。

私にとっては急な事だったのですが、でも、弟は病氣とたたかっています。私もお母さんを思い出して頑張ろうと思いました。

「料理」お母さんのシチューを思い出しながら作りました。簡単に見えていたジャガイモの皮むきがうまくいかず、皮がついた不格好なジャガイモになりました。それでもお父さんは美味しいと言って食べてくれました。

「洗濯」洗剤と柔軟剤を洗濯機に入れて洗濯をしました。洗濯後、干そうと思ったらアイッシュニまみれ。ポケットに入れたばなしなのを思い出しました。

「掃除」掃除機で部屋を掃除しました。蒸

し暑さとセミの声を後ろに、汗がダラダラと
背中を伝えます。いつもお母さんが重いソ
ファをどがして掃除をしていましたが、私に
はとても出来ませんでした。

一日を終えて、お父さんに今日一日の話を
したら「よく頑張ったね」とほめてくれまし
た。うれしか。たけれど、それと同時にいつ
もお母さんがこんなにも大変な事を私たちの
ためにしてくれていた事に気が付きました。
夜いつも側にいてくれていたお母さんがいな
い。お母さんに会いたい。涙が止まりませ
んでした。

数日後、弟は無事退院し、お母さんも帰っ
てきました。「お母さんありがとう」これが
私のおがえりの言葉になりました。

